

予防接種の注意・お願い

髄膜炎菌 予防接種

髄膜炎菌ワクチンは、致命的となることもある重症な髄膜炎菌感染症を予防する不活化ワクチンです。

まだあまり一般的ではありませんが、集団生活を送る10代や、留学予定者、海外の流行地へ渡航する人に推奨されています。任意接種です。



世界の
子どもに
ワクチンを

日本委員会

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

○受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知ってほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。

○健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。

○前日は入浴して、体を清潔に。

○予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。

○母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）

○接種の会場で、体温を測り、記入します。

○予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ててください。

○接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。

髄膜炎菌ワクチンは髄膜炎菌 (Neisseria meningitidis) による感染症を予防します。髄膜炎菌感染症は、髄膜炎（脳を覆う組織の感染症）や危険な水準の低血圧（ショック）につながり、死に至ることもあります。これらの細菌は、小児の細菌性髄膜炎の原因として最も多く、成人の細菌性髄膜炎の原因としては2番目に多いものです。

髄膜炎菌感染症は、ワクチンで防ぐことができる病気です。日本でも2015年5月から、髄膜炎菌ワクチンの接種ができるようになりました。侵襲性髄膜炎菌感染症（IMD）は0～4歳の乳幼児、10代後半の思春期に感染するリスクが高いことが分かっているので、早めに接種しておくことで感染リスクの高い時期を乗り越えることができます。日本脳炎ワクチンの標準的な定期接種対象年齢の3～5歳（追加接種9歳）頃に合わせて髄膜炎菌ワクチンの接種を検討しましょう。また、思春期でワクチンを打つタイミングを迷っているお子さんの場合は、接種を忘れないように、DT（2種混合）ワクチンを接種する11歳頃に合わせて髄膜炎菌ワクチンの接種を検討しましょう。

寮や合宿などの集団生活、髄膜炎菌が流行している地域への渡航は特に感染のリスクが高くなります。

まだワクチンを打っていない、または打ってから時間が経っているお子さんの場合は、新学期や集団生活を始める前の春休みや夏休み、部活動の合宿前、海外渡航・海外留学の前などにかかりつけの医師に相談しましょう。

髄膜炎菌の予防接種

任意接種

使用ワクチン：メンクアッドフィ（筋注）

接種方法：0.5mlを1回接種

予防接種を受けたあとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために15分程度は医院の中にいていただき、そのあともしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしてください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさげられます。）

髄膜炎菌ワクチンは不活化してあるワクチンです。

次に受ける異なるワクチンとの接種間隔は、とくに制限はありません。

髄膜炎菌ワクチン

- ①注射したところは、そのままにするか、適度にもんでください。
- ②今日は激しい運動は避け、普通の生活をしてください（**入浴はかまいません**）。
- ③熱を出すこともほとんどないようです。
- ④注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのままでも数日でおさまります（程度の強いときには受診して下さい）。